

## 乳幼児のメディア接触と母親の意識・行動との関連

鳥取大学医学部保健学科 母性・小児家族看護学講座

遠藤有里, 杉原佑美, 祖田亜希子, 藤原汐里, 村上怜花, 花木啓一, 南前恵子

How the way infants/toddlers get along with media is affected by the attitude and thought of their mothers.

Yuri ENDO, Yumi SUGIHARA, Akiko SOTA, Shiori FUJIHARA, Reika MURAKAMI, Keiichi HANAKI, Keiko MINAMIMAE

*Department of Women's and Children's Family Nursing, School of Health Science, Faculty of Medicine, Tottori University, Yonago 683-8503, Japan*

### ABSTRACT

The purpose of the current study was to obtain a hint how to improve the way children get along with various media in their daily life. For this purpose, we conducted an inventory survey on mothers who had infants and toddlers to describe the way their children get along with media and how that way is influenced by mothers' attitude and thought. We found that the longer the daily time mothers contact with a media, the longer the time their children do so. We also found that, when mothers are reluctant for their children to contact with a media, their children tend to spend less time with the media. These findings suggest that the way children get along with a media is influenced by their mothers' attitude to and thought on the media.

(Accepted on July 17, 2017)

**Key words :** media contact, infant, toddler, mothers attitude

### はじめに

近年メディア環境は著しく多様化し、乳幼児でもテレビ、ビデオ、スマートフォンなどの多様なメディアに日常的に接触するようになっている。2004年、日本小児科医会は「子どもとメディア」に関する提言<sup>1)</sup>において、メディアへの長時間に及ぶ接触が子どもの心身の健全な発達に悪影響を及ぼすという懸念を表明した。すなわち、乳児期からの長時間のメディア接触は、外遊びの機会や人との関わり合いの機会を奪い、運動不足、睡眠

不足、コミュニケーション能力の低下などを生じ、心身の発達の遅れや歪みの原因となりうる事が指摘された。特に象徴機能が未熟な2歳以下の子どもがテレビに長時間接触することは、親子が一緒に遊ぶ時間を少なくし、言葉や心の発達に及ぼす影響が大きいことが危惧されている。言葉の習得には言葉のキャッチボールが必要であるが、メディアは一方的なコミュニケーションで対話が成立しない。また、メディアを子守代わりに使用する親が増加していることも、この長時間化の背景にある。

これまでに、メディア接触が子どもの発達に及ぼす影響については多くの報告があるが、乳幼児をもつ親が、子どものメディア接触をどのように意識しているかを検討した報告は少ない。本研究では、将来的により適切なメディア接触のありかたについて示唆を得ることを目的として、乳幼児をもつ母親を対象とし、子どものメディア接触に対する意識について調査した。

### 対象および方法

#### 用語の定義

本研究ではテレビ、録画・DVD、スマートフォン、パソコン、タブレット端末を「メディア」とする。またメディアを視聴する、使用することを合わせて「メディア接触」と表現する。

#### 調査方法

本研究の調査期間は2017年8月から9月である。A市の幼稚園・保育園に通う子どもを持つ母親367名を対象として、無記名の自記式質問法により乳幼児のメディア接触の実態調査を行った。A市の幼稚園・保育園の担当職員に協力を得て質問紙を配布、回収箱を設置し、投函をもって同意を得られたと判断した。

#### 調査内容

乳幼児のメディア接触の実態調査内容は基本的属性（乳幼児をもつ母親とその子どもの年齢、性別）、母親とその子どものメディア接触状況、メディア接触の目的、メディアの選択理由、ルール、子どものメディア接触に対する母親の抵抗感、メディア接触が子どもに及ぼす影響について調査した。

#### 分析方法

回収は209名（56.9%）で、そのうちの有効回答189名（49.8%）を分析対象とした。母親のメディア接触時間3時間未満を「短時間群」、メディア接触時間3時間以上を「長時間群」とした。子どものメディア接触時間は日本小児医会の提言にそって、メディア接触時間2時間未満を「短時間群」、メディア接触2時間以上を「長時間群」とした。

#### 解析方法

データの集計解析には統計ソフトSPSS

ver.24.0, Excel 2013 を用い、相関解析、カイ2乗検定を行った。有意水準は $p < 0.05$ とした。

#### 倫理的配慮

本調査への協力は自由意志であること、協力しない場合でも何ら不利益が生じないことを文章にて説明した。調査は無記名とし、個人が特定されないよう配慮した。

本研究は鳥取大学医学部倫理委員会の承認を受けて実施した（17A003）。

## 結 果

#### 対象者の背景

母親の年齢は $36 \pm 5.4$  (mean + SD) 歳で、20歳代21名（11.1%）、30歳代114名（60.3%）、40歳代54名（28.6%）であった。子どもの年齢は $3.5 \pm 1.8$  (mean + SD) 歳で、0歳（乳児期）11名（5.8%）、1～3歳（幼児前期）82名（43.4%）、4～6歳（幼児後期）96名（50.8%）であった。

母親の年代に対する子どもの年齢は20歳代では乳児期2名（9.9%）、幼児前期13名（52.2%）、幼児後期6名（27.9%）、30歳代では乳児期7名（6.1%）、幼児前期59名（51.7%）、幼児後期48名（42.2%）、40歳代では乳児期1名（1.7%）、幼児前期11名（20.5%）、幼児後期42名（77.6%）であった。

子どもの男女比は男児83名（43.9%）、女児106名（56.1%）であった。

#### メディアの所有率

テレビの所有率は188名（99.5%）、録画・DVD180名（95.2%）、スマートフォン184名（97.4%）、タブレット端末87名（46%）、パソコン137名（72.5%）であった。

#### メディア接触時間

母親のメディア接触時間は2～3時間が最も多く、平均3時間だった。子どものメディア接触時間は1～2時間が最も多く、平均1.7時間だった（表1）。

#### 母親と子どものメディア接触時間

母親のメディア接触時間と子どものメディア接触時間には有意な相関がみられた（ $r = 0.324$   $p < 0.05$ ）（図1）。

母親のメディア接触の長時間群、短時間群と母

表1 対象者の基本的属性

母親年齢			36.1±5.4歳
母親年代	20歳代	21名	(11.1%)
	30歳代	114名	(60.3%)
	40歳代	54名	(28.6%)
子ども年齢			3.5±1.8歳
子ども発達段階	乳児期	11名	(5.8%)
	幼児前期	82名	(43.4%)
	幼児後期	96名	(50.8%)
子ども性別	男児	83名	(43.9%)
	女児	106名	(56.1%)
メディア所有	テレビ	188名	(99.5%)
	録画・DVD	180名	(95.2%)
	スマートフォン	184名	(97.4%)
	タブレット端末	87名	(46%)
	パソコン	137名	(72.5%)
母親のメディア視聴時間			3±1.9時間
子どものメディア視聴時間			1.7±1.3時間

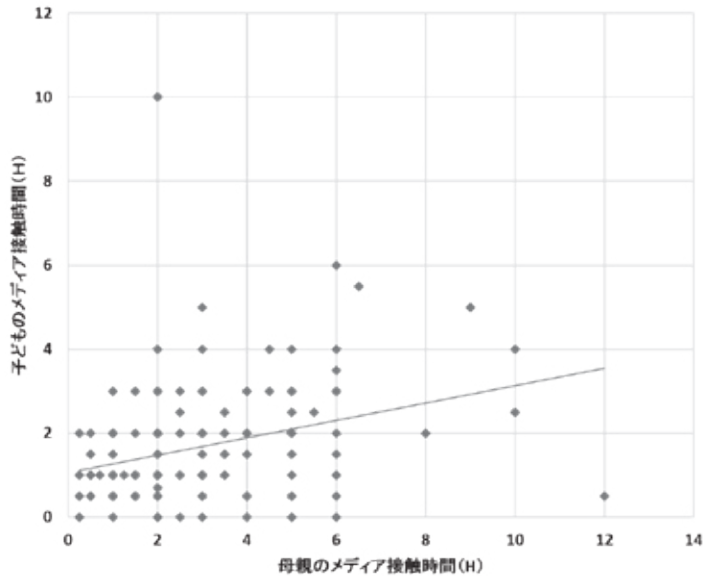


図1 母親と子どものメディア接触

親の年齢には有意な関連がみられた  
( $p < 0.05$ ) (表2).

子どものメディア接触の長時間群、短時間群と子どもの発達段階別の年代との間には有意な関連がみられた ( $p < 0.05$ ) (表3).

母親の年代別に子どものメディア接触時間を比較すると、20歳代の母親の子どものメディア接触時間は短時間群のほうが多く、30歳代、40歳代の母親と子どものメディア接触時間の割合はほぼ同じであった。

表2 母親のメディア視聴時間, 母親の年代

	n	20歳代	30歳代	40歳代	(%)
短時間群	95	23.8	47.8	67.9	*
長時間群	92	76.2	52.2	32.1	

\*p<0.05

表3 子どものメディア視聴時間, 発達段階

	n	乳児期	幼児前期	幼児後期	(%)
短時間群	100	81.8	43.5	41.5	*
長時間群	86	18.2	37.5	58.5	

\*p<0.05

### 子どもがメディア接触をし始めた年齢

テレビは乳児期より使用が94名(49.7%), 幼児前期より使用89名(47.1%)であり, 約半数の子どもは乳児期よりメディア接触が見られた。幼児前期で録画・DVDは118名(62.4%), スマートフォンは84名(44.4%)と使い始める割合が高かった。しかしスマートフォンは64名(33.9%)で使ったことがないとの回答も見られた。タブレット端末127名(67.2%), パソコン159名(84.1%)で使用したことがないとの回答が見られた。

### 子どもにテレビ, 録画・DVDを見せる目的

母親179名(96.8%)が子どもにテレビを見せていたが, その目的は, 家事などで手が離せない時の子守のためが126名(38.5%)と最も多く, 次に移動時間や待ち時間にじっとさせるため57名(17.4%), 知識・教養を身につけるため52名(15.9%), ぐずる時機嫌を良くするため46名(15.9%)であった。発達段階別にみると, 乳児期は家事などで手が離せない時の子守のため2名(22.2%)であったが, 兄弟が見ているので一緒にみているとの回答もみられた。幼児期でも家事などで手が離せない時の子守のためが幼児前期61名(40.1%), 幼児後期63名(40.6%)と多くみられた。

### 子どもにスマートフォン, タブレット端末を使う目的

母親105名(55.9%)が子どもにスマートフォン, タブレット端末を使用させていたが, その目

的は, 移動時間や待ち時間にじっとさせるため45名(28%)が最も多く, 次いで家事などで手が離せない時の子守のため38名(23.6%)であった。発達段階別にみると, 乳児期は家事などで手が離せない時の子守のため, 移動時間や待ち時間にじっとさせるためがともに2名(40%)であった。幼児前期は移動時間や待ち時間にじっとさせるため, 家事などで手が離せない時の子守のためがともに4名(25%), 幼児後期はぐずる時の機嫌を良くするため4名(26.7%)であった。

### 子どもがメディア接触する時のルール

母親162名(93.7%)が子どもがメディア接触する際にルールを決めていたが, 具体的なルールとして, スクリーンに目を近づかせないようにする113名(16.6%)が最も多い回答であった。次いで使い方の約束を守れなかったら注意する96名(14.1%), 使う時間の長さを決めている90名(13.2%)であった。その他の回答には子どもに操作させない, 子ども1人で使わせない, 必ず親と一緒に見るなどの回答もみられた。発達段階別にみると, 乳児期は特にルールを決めていない3名(30%)に対し, 幼児期はルールの項目が増える傾向にあった。幼児後期は幼児前期に比してどのルールに関しても決めている割合が高い傾向がみられた。

### 子どものメディア接触に対する母親の抵抗感

テレビに対しては抵抗感がある(2.1%), やや抵抗感がある(25.9%)あまり抵抗感がない(32.8%),

抵抗感がない(15.9%)という回答であったが、スマートフォンに対しては、抵抗感がある(44.7%)、やや抵抗感がある(44.7%)、あまり抵抗感がない(1.6%)、抵抗感がない(2.1%)という回答であった。スマートフォン、タブレット端末、パソコンについては約半数の母親が抵抗感がある、やや抵抗感があると回答していた。

母親のメディア接触に対する抵抗感と子どものメディア接触時間において、メディア接触短時間群は、メディア接触長時間群に比してメディア接触に対して抵抗感がある、やや抵抗感があると感じている母親の割合が高くなる傾向にあった。

### メディア接触が子どもに及ぼす良い影響

メディア接触が子どもに及ぼす良い影響の回答で最も多かったのは、歌や踊りを楽しめる(72%)であり、次いで知識・教養が身につく(48.7%)であった。良い影響の選択項目12項目のうち、母親の選択数の割合は2項目以下104名(55%)、3項目以上選択した母親85名(45%)であった。

### メディア接触が子どもに及ぼす悪い影響

メディア接触が子どもに及ぼす悪い影響の回答で最も多かったのは、視力が落ちる(78.8%)であり、次いで夢中になり過ぎる(74.1%)、大きくなった時に依存する心配(44.4%)であった。その他の回答として、勉強などしなくなる、インターネットトラブル、昼夜逆転生活などを引き起こすなどがみられた。悪い影響の選択項目13項目のうち、母親の選択数の割合は3項目以下106名(56%)、4項目以上83名(44%)であった。

## 考 察

近年の急速なメディア普及は大人だけでなく、子どもの日常生活に大きな影響を及ぼしており、子ども達がどのようにメディアとつきあっていけばいいのかが問われるようになってきた。2004年、日本小児科医会は長時間のメディア接触が子どもの発育に及ぼす影響を懸念し、「子どもとメディアの問題に関する提言」を発表した。この中で、長時間のメディア接触が、乳幼児の情緒や言語発達の遅れ・集中力・想像力の低下・多動・視力や姿勢の悪化・睡眠障害などをもたらすことが指摘されている。これらのことを踏まえ、本研究では乳幼児をもつ母親を対象に、子どものメディア接触

に対する意識について検証した。

子どものメディア接触時間は半数以上が2時間未満であり、メディアを使用し始める時期については乳児期よりテレビを使用し始め、録画・DVD、スマートフォンは幼児前期に使い始める子供が多くみられた。家庭でのテレビ、録画・DVD、スマートフォン等の所有率は95%以上であることから分かるように、子どもの身近にはメディアがあり、幼い頃から接触する機会も増えてきている。

母親と子どものメディア接触時間は、母親のメディア接触時間が長いと子どものメディア接触時間も有意に長い傾向にあり、先行研究と一致する結果であった。乳幼児期の子どものメディア接触には母親のメディアとの関わりが影響していると考えられる。母親の年齢と母親のメディア接触時間では、母親の年代とメディア接触時間の長短との関連がみられ、40代の母親より30代、20代と年齢が若くなるにつれてメディア視聴時間が長くなる傾向がみられた。養育者が長時間視聴しているほど、子どもも長時間視聴に陥りやすいことが示されていることから、母親に対して関わっていく必要性について示唆された。

子どもの年齢と子どものメディア接触時間は子どもの年齢が高くなるほど視聴時間が長くなる傾向にあった。子どもをメディアに接触させる目的として、家事などで親の手が離せない時や、移動時にじっとさせるためなどといった子守の役割でメディアを使用している母親が多くみられた。また子どもの発達段階別において、乳児期、幼児前期、幼児後期ともすべて母親はメディアを子守として使用していた。子どもの言語能力、運動能力や社会性など発達を促進するためには、手で触れる自由な遊びや、養育者との双方向のコミュニケーションや関わりが重要とされる。テレビなどの子守は一方向的なコミュニケーションであり、対話や相互作用が少なくなってしまう危険性について養育者とともに考え、メディアの活用方法について考えていく必要がある。また、メディア内容についての選択理由は、乳児期は母親や家族の好みで選択している家庭が多くみられたが、子どもの年齢が上がると子ども自らの意思によって選択されていた。これらのことから、子どもの年齢が高くなるとメディア接触する目的が多様化すること、子ども自身がメディアを選択することで子どもの好

みが反映され、メディア接触の長時間化の要因の一つとなっていくことが考えられる。

メディア接触時のルールでは、スクリーンを目に近づけないようにする、使う時間の長さを決めている、場所を暗くしないようにしているなどの回答が多くみられた。子どもの年齢別にみると、年齢が大きくなるにつれてルールを決めている母親が多くなっていった。このことより、子ども達は年齢が高くなると自分の意思でメディア接触し始め、接触時間も長時間化するため、各家庭で早い段階からメディアとの付き合い方について考えていく必要がある。

子どものメディア接触に対する母親の抵抗感はテレビ、録画・DVDではあまり抵抗感がない、抵抗感がないと回答した母親の割合が多くみられたのに対し、スマートフォン、タブレット端末、パソコンに対しては抵抗感がある、やや抵抗感があると回答した母親の割合が多くみられた。テレビを子どもに見せていない母親は3.2%であったが、スマートフォンは44%の母親が子どもに使用させていない事が分かった。テレビや録画・DVDが普及すると同時に使用が当たり前になった生活の中にあり、あまり抵抗感がなく子どもにも使用されている状況が考えられる。現在ではスマートフォンが生活に普及してきていることから、抵抗なく子どもにも使用する母親も増加してくることも考えられる。また母親の子どものメディア接触に対する抵抗感が大きくなると子どものメディア接触が短くなるなどの結果もみられ、母親のメディアに対する意識は子どものメディア接触に影響を及ぼしていることが考えられる。

## 結 語

乳幼児期における子どものメディア接触には母親のメディア接触状況やメディアに対する考え方や意識が関係していること、子どもの年齢が大きくなるとメディア接触する目的が多様化し、接触時間も長時間化することが明らかになった。メディア接触が子どもに与える影響について母親が意識し、今後各家庭の生活習慣に合わせたメディアの付き合い方について考える機会を作っていくことが重要である。

本研究に対し、調査にご協力いただきました幼稚園、保育園の保護者の皆様、先生方に深く感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 「子どもとメディア」の問題に対する提言. 社団法人日本小児科医学会「子どもとメディア」対策委員会. [http://www.jpa-web.org/dcms\_media/other/ktmedia\_teigenzenbun.pdf]
- 2) 田中順子. 情報社会における子供とのコミュニケーション:「双方向性」の意味を問い直す. 情報社会試論. 2004; 9: 64-73.
- 3) 佐藤和夫. 乳幼児期におけるメディアの影響. 特集1 子どもとメディアの問題を考える. 日小医会報. 2017: 18-23.
- 4) 内藤裕美. 「子どもとメディア」医会の取り組み～提言から12年間をふりかえって、そして今後～. 特集1 子どもとメディアの問題を考える. 日小医会報. 2017: 15-17.
- 5) 若松美貴代, 武井修治. 乳幼児の長時間視聴に関連した要因の探索－育児環境と母親の意識に焦点をあてて－. 小児保健研究. 2013; 72 (2): 261-266.
- 6) 小泉ひろみ, 後藤敦子, 苗村双葉. 小中学生におけるメディア環境がコミュニケーション能力や睡眠障害, 肥満へ及ぼす影響. 日本小児科学学会雑誌. 2012; 116 (2): 1909-1916.
- 7) 松山由美子, 村上涼, 堀田博史, 松河秀哉, 森田健宏, 吉崎弘一. 幼児のパソコン利用に関する調査－保護者のアンケートより－. 四天王寺大学紀要. 2012; 53: 85-97.
- 8) 武市久美. 乳幼児をもつ家庭におけるテレビ視聴に関する研究－母親のテレビ視聴時間に着目して－. 東海学園大学研究紀要. 2011; 16: 149-157.
- 9) 加納亜紀, 高橋香代, 片岡直樹, 清野佳紀. 幼児期のテレビ・ビデオ視聴と養育環境の関連. 小児保健研究. 2009; 68 (5): 549-558.
- 10) 栗谷とし子, 吉田由美. 幼児のテレビ・ビデオ視聴時間, ゲーム時間と生活実態との関連. 小児保健研究. 2008; 67 (1): 72-80.
- 11) 服部伸一, 足立 正, 嶋崎博嗣, 三宅孝昭. テレビ視聴時間の長短が幼児の生活習慣に及ぼす影響. 小児保健研究. 2004; 63 (5): 526-523.
- 12) 小島正子, 松井秋子, 佐々木純子, 大瀬栄子,

高松久美子, 松田和子, 横濱弘美, 安田すみ  
江, 田代実. 乳幼児のテレビ・ビデオ視聴に

関する実態と母親への意識調査. 外来小児科.  
2004; 7 (2) : 161-164.